

第276回くらしの植物苑観察会 令和4年3月26日（土）

## 「花見の民俗」

関沢 まゆみ（国立歴史民俗博物館 副館長）

### はじめに

歴博と城址公園のエリアには桜の木がたくさんあります。3月になると、1番早く咲く木から順次、開花して、青い空に淡いピンクの花が満開になっていく風景は本当に楽しいものです。今回のテーマは、「花見」です。コロナ禍で変わったことの1つが、花を見ながら歩くのはよいが、木の下で飲食をするのはなくなったことです。「花より団子」という言葉があるように花を見るだけでなく、お弁当やお団子などを食べることもセットですね。これは興味深い点です。



植物苑の桜と菜の花（撮影：川村清志氏）

### 1. 梅と桜

『万葉集』でたくさん歌われているのは、桜より梅であることはよく知られています。梅は110首、桜は43首です。桜は自生していましたが、梅は中国から輸入されたもので、官人貴族たちは観賞用に栽培していました。

大伴旅人が梅の花を愛でる宴会で歌った歌、「梅の花 散らまく惜しみ わが園の 竹の林に 鶯鳴くも」（梅の花よ、散らないでください、惜しいから。私の庭の竹の林に鶯がやってきて鳴いています。）には、とても春らしい風景、梅と鶯が読まれており、梅の花の香が漂ってくるようです。

しかし、平城京から平安京に移るころから梅にかわって桜が中心になっていきます。宮中の花見の宴といえば、嵯峨天皇が弘仁3年（812）に神泉苑で観桜の花宴を開いたのが最初とされています（『日本後記』）。

平安時代中期には、一条天皇の中宮彰子に仕えていた伊勢大輔という女性が歌ったという、「いにしへの 奈良の都の 八重桜 けふ九重に にほひぬるかな」という有名な歌があります。奈良の興福寺の八重桜が美しいと評判になっていたときの歌です。花びらが八重にも咲く華麗な桜へのあこがれが詠まれています。

しかし、その一方では『古今和歌集』には、「うつせみの 世にも似たるか 花桜 咲くと見しましに かつ散りにけり」という歌もあります。うつせみのようなはかない世の中にも似て、桜の花の美しさとはかなく散るさま、それが趣き深く歌われています。そのような桜の花の散り方を見て、人間の生き方と重ねてみる考え方が、平安時代の貴族たちにはあったようです。それは、仏教の無常観とも通じていきました。桜をよんだ歌は日本では古来大変多く、それぞれの時代を生

きた人びとが桜の花をどのように見たかがわかってとても興味深いです。

## 2. 花見と弁当

豊臣秀吉の時代には、慶長3年（1598）の醍醐の花見が、豪華絢爛なことで知られています。また、徳川家光は奈良吉野の桜を上野に移植し、徳川吉宗は飛鳥山、向島、御殿山などに桜を植樹しました。そうして花見は武士も町人も含めて広く人びとの楽しむ春の娯楽になっていきました。歌川広重は何枚も飛鳥山の花見の風景を描いています。女性たちが重詰め弁当と燗酒を広げて三味線をひいたり、手遊びをしたりして楽しんでいる様子がわかります。『料理早指南』（享和元年（1801））という本をみると、花見弁当には、焼飯（やきい）と呼ばれる焼きおにぎりが定番だったようです。

一方、農村では4月になると春の1日、山や磯に行つて弁当を食べるなどして遊ぶ、山遊び、磯遊びと呼ばれる行事が伝承されていました。これは田植えの前に行なわれ、1年の豊作・豊穰を願うものとされていました。

このように春に、山に行つて遊ぶ、花見をする、という習慣が日本には古くからありました。その背景について、民俗学者の折口信夫は、一年の豊作を占う意味があったと述べています。折口によると、「花と言ふ語は、簡単に言ふと、ほ・うらと意の近いもので、前兆・先触れと言ふ位の意味になるらしい」（「花の話」1928年）。桜も「一年の生産の前触れ（さきぶれ）として重んじられた」（「先触れの木」）のだと述べています。つまり、その年の豊作を予言（先触れ）してくれるもの、という感覚があったというのです。だから、花見というのはただ花を見て楽しむというだけでなく、大自然の中の草花や動物たちが自然の恵みをいただいて元気に活動を始めるに当たつてのいわば「元気づけ」：インスパイアの意味があったということができそうなのです。

## 3. 春、山から花を採ってくる民俗

むかしの農村では、田植えの前には、早乙女となる少女たちが山に行つて、躑躅の花を頭に挿してくるとか、山から採つてきた躑躅を田の水口に供えて祭るなど、春の田植え前に山の花を採ってくる民俗の伝承がありました。そして、卯月八日の花まつりにも躑躅や山吹、藤の花を採つてきて、竹竿に挿して家の軒に高く掲げて、先祖の霊を招く伝承などもありました。花見だけでなく、春の山に咲いた花を手折つて、その生命力を1年の豊作・豊穰に託す民俗が広く日本各地で伝承されていたのです。

このように、春の花をめぐる民俗をみていると、お花見には美しい花をめぐるという意味と同時に、自然のリズムに合わせて春の生命力をいただき活性化する、そのような意味があることがわかります。ですから、花見は花を見るだけではなく、花見弁当がつきものであり、おいしい料理を見て元気をいただくということが大事だったことがわかります。「花より団子」というのも、意外と大切なことを言っていたのかもしれない。

.....

**次回予告** 第277回くらしの植物苑観察会 令和4年4月23日（土）

「桜草の栽培史-明治期から昭和初期まで-」 水田 大輝氏（日本大学生物資源科学部）

13:30～15:30 苑内休憩所集合 申込不要 定員20名